

主を讃美する人生のはじまり

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 1章 39節～56節

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。」

そこで、マリアは言った。

「わたしの魂は主をあがめ、

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も わたしを幸いな者と言うでしょう

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。

主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、

権力ある者をその座から引き降ろし、

身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、

富める者を空腹のまま追い返されます。その僕イスラエルを受け入れて、

憐れみをお忘れになりません。

わたしたちの先祖におっしゃったとおり、

アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。

[序] クリスマスの「讃美」

クリスマスの讃美歌というのは沢山ありますね。四回のアドベントだけでは歌いきれないほどです。でも改めて思ったことですが、一番最初のクリスマスの讃美が書かれているのはルカによる福音書ですね。一番有名なのは、あのクリスマスの夜の「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」という天の軍勢たちの大合唱だと思います。しかし、それだけではありません、同じルカ福音書 2 章には、老人シメオンが自分の死を前にして、イエス様を腕に抱きながら神様を讃えた「シメオンの賛歌」がありますし、イエス様が生まれる直前に、口がきけなくなっていた祭司ザカリア(バプテスマのヨハネの父)の口が開いて、神様を讃えながら語った預言の歌(「ザカリアの預言」)が記されています。

そして、ルカ福音書が一番最初の讃美として紹介してくれているのが、今日の聖書箇所である、主イエスの母となったマリアが神様を讃えた歌、いわゆる「マリアの賛歌」です。今日ご一緒にこの

賛歌を味わうことが出来ることは、本当に嬉しいことです。

[1] 聖霊によって自由にされたマリアの歌

ご一緒に交読もしたこの「マリアの賛歌」ですけれども、これは実に堂々と 確信に満ちた讚美ではないでしょうか。「何の先入観もなしにこの歌の作者はだれかを当てて下さい」と言われたら、先ずこれがまだおとめのマリアの歌だとは分からないと思います。誰か男の預言者が歌った歌だと言っても不思議ではないほどです。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」

とマリアは語り始めました。私は本当に不思議に思うのです。何故かといえば、恐らくまだ十代半ばであったマリアです、そして許嫁ヨセフと近い将来、結婚をし、家庭を築くことを心待ちにしていたマリアだと思うのですが、そのプランが突然現れた天使のお告げによって全く崩されてしまった訳です。しかしどうでしょうか、マリアは神様に文句を言うどころか、突き抜けた思いを持って、心の底から神様を讃えているのですから。

しかし、マリアに戸惑いがあったことを聖書は隠してはいません。

「マリアはこの言葉に戸惑い、この天使の挨拶は何のことかと考え込んだ」(ルカ 1:29)とあります。ここでの「考え込む」という言葉は、口語訳聖書では「思いめぐらす」と訳されていました。これは大事なことではないでしょうか。マリアは、自分の内側に向かって沈黙考したのではなく、御使いの声を逃げずに真正面から受け止めた故に、その言葉を神様に向かって深く黙想したのです。そして「神様のご計画されることなら、私に何が言えるだろう。はいと従う以外ないではないか」という思いに、聖霊によって導かれたのだと思います。

ですからマリアはこう応答することが出来ました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように」(1:38)。ですから、この言葉はマリアの覚悟や頑張りが生んだ言葉ではありません。本当に聖霊によって自由にされた人の言葉だと思うのです。

[2] 神様の「器」となったマリア

マリアの信仰は、旧約聖書の信仰をよく受け継いだものであると思います。この「マリアの賛歌」はサムエルの母となったハンナの歌とよく似ていると言われます。その焼き直しではないかという人がいるほど確かに似ている部分は多いです。他にも詩編やイザヤ書やハバクク書やミカ書などを引用しているのではないかと考える学者もいるようです。しかし、そうだとしてもマリアがこの歌をこの時歌ったというからには、どれほど旧約聖書をそらんじていたことでしょうか。それに例えばハンナの歌と比較してもその違いは明らかにあります。ハンナは、それまで子供が与えられず、それ故夫エルカナのもう一人の妻ペニナから随分酷い仕打ちを受けて、その後でようやくサムエルが生まれました。その時の歌の出だしはこうです。

「主にあってわたしの心は喜び／主にあってわたしは角を高く上げる。わたしは敵に対して口を

大きく開き／御救いを喜び祝う」(サムエル記上 2:1)。

旧約の時代、子どもが与えられないということは恥なこと、神様の祝福から漏れていることとされていましたから、ようやく一人の女性としてみなされることの喜びと、どこかペニナを見返してやったという様な部分で、「敵」という表現に出できます。しかし、しかし**マリアの讃歌**には「敵」という言葉は出て来ません。また**自分の名誉**のようなものも聞こえてきません。他者との比較はないのです。純粋に主を喜んでいます。これは大事なことだと思いました。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」

この「あがめる」というのは、ラテン語では「マグニフィカート」と言っ「大きくする」という意味があるそうです。主を、神様を、私の魂は大きくしますと。言い換えればその分自分を小さくするということです。ですから、マリアは続けてこう告白しました。

「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」

マリアは、自己主張していません。ただ神様の言葉を「ハイ」と受け止めているだけです。マリアは「器」になったのです。神様の言葉を受けとめる器。「あなたは神の子の母となるのだ」という、文字通り自分の人生がひっくり返るような神様からの言葉も、そのまま受け入れました。悲壮な思いではなく、このわたしが神様に目をとめて頂いたとは、何と幸いなことでしょう！と主を讃美しています。

これから生まれるイエス様の人生、何と過酷なご生涯であったことでしょうか…。私たちはそれを聖書から知っています。マリアは母として、それをつぶさにずっとご覧になったのです。あのゴルゴタの丘、わが子の十字架のもとにも赴きました。そして殺され、吊り降ろされた主イエスをその腕に抱きました。マリアが、神様のご計画を静かに受け入れる強さを持っていなければ、そのような苦しい人生にはとても耐えられなかったと、私は思います。マリアの人生も神様によって選ばれただけでなく、支えられ、強められた人生だったのではないのでしょうか。この私はどうか？と問われることでもあります。

[3]マリアの賛歌と「神の国」のひろがり

この「マリアの賛歌」は、マリア自身が個人的に主を喜んでる言葉から始まっていますけれども、何と大きな広がりを持っていることでしょうか！

「その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます」(1:50)と、神様の憐れみは、時代を超えて、決して変わらずに、主を信頼する者に確かであることを歌い、信仰の父と呼ばれるアブラハムとその子孫に約束されたとおり、神様は決してその憐れみをお忘れになることはない、確信を持って結んでいます。

さらにその前には、旧約聖書の預言の成就である「神の国の到来」がやって来る時の逆転を歌っています。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降

ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」(1:51～53)。

この世は不公平だ、不条理だと私たちは嘆くことがありますが、主にあってはそれを突き抜けた眼差しを、この地上にあっても、私たちは持つことが出来るし、主イエスがもう一度おいで下さる終わりの時には、神様のご支配だけが実現するのだ、と天を仰がせてくれているのではないのでしょうか？

私たちはマリアと共に「アーメン！」と言いたいと思います。

[4]いのちの尊さは神様から来る

今年もあと二週間で終わり、一年を振り返る時でもあると思いますけれども、私は先週の祈祷会に出席した時知った、千葉教会の矢野満先生が主に召されたことが大きなショックでした。先生はまだ 64 才の若さでした。私自身東京バプテスト神学校で大変お世話になりました。とても穏やかで、本当に誠実で、自然に人を励ますことをされる牧会者でもありました。そしてイエス様を伝える情熱は、いつも熱いものがありました。ですから四回目の手術を終えた後も、折ある毎にフェイスブックで「牧師室から～あなたに伝えたい～」と文章をアップしておられました。

今もその手記を読むことが出来ます。9月19日にはこのように書かれていました。「手術から一週間が過ぎました。…思うようにならない身体と痛みを耐える姿に、何もできない私ですが、神さまは多くの助けを与えてくださっていることを教えてください。『事実、御自身、試練を受けて苦しめたからこそ、試練を受けている人を助けることができになるのです』(ヘブライ人 2:18)。イエスさまは、十字架上の痛み苦しみの極みを体験されました。私たちが痛んでいるときこそ、その思いを理解してくださり、励ましてくださるイエスさまがいてくださいます。」

矢野先生は、このような最中でも伝道されたのです。

そうですね、矢野先生がおっしゃるように、イエス様の命は、私たち一人ひとりとどんな時も寄り添うために、神様がこの地上にお送り下さった命なのです。イエス様の命は、神様そのものの命です。神様は、高みから見おろされるお方ではなく、私たちの人生の只中に入って来て下さっているお方なのです。

神様は、どこまで低い所に来て下さったのでしょうか？ ルカ福音書の 2 章では、それは家畜小屋の飼い葉桶です。赤子としてです。けれどもその前の 1 章では、マリアの胎の中に宿られたのです。マリア自身がその「器」となることを受け入れたので、胎児となって来て下さったのです！

マリアとエリザベトのこの出会いは、ある意味ユーモラスでさえあると思います。「マリアの挨拶をエリザベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリザベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました』(1:41～44)。

思わず微笑みたくなるような聖書の記事です。赤ちゃんが胎の中で踊ったのです。そしてそのことを引き起こしたのは**マリアの声**です。そのマリアの胎の中には**イエス様の命**が宿っている。つまり**イエス様が挨拶された**ようなものです。その挨拶に、もうひとつの命が応えている。イエス様の祝福を赤子であったバプテスマの**ヨハネ**が喜び踊っているということですね。不思議な記事かも知れませんが、私は嬉しくなりました。私たちが皆、胎児だったことがあった訳です。その時、イエス様は「**良く生まれて来たねえ**」と、挨拶されたのではないのでしょうか？ このマリアとエリザベトのやり取りの記事は、美しいと思います。それは言うてみれば、**命そのものの美しさ**と言いますか、**人間の命に注がれている神様の祝福の麗しさ**といったものを感じないではられません。

妻の由紀子も二週間前の週報の「コラム」で、私の胎の中にも**イエス様は来て下さったのだから、既にこのお腹の赤ちゃんを祝福してくれているのだ**と思って**平安が広がったことを忘れられない**、と詩編 139 編の聖句と共に書いてくれました。

「胎児であったわたしをあなたの目は見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている、まだその一日も造られないうちから。あなたの御計らいはわたしにとっていかに貴いことか。」(詩編 139:16~17)

今年、私がとても心に深く残った出来事は、あの座間市で起った**連続殺人事件**です。まだ若者と言っていい容疑者の心が全く理解できないと人々は言います。確かにそうです。けれども恐ろしいのは、彼が「**首吊り師**」という匿名を使った誘いに、**沢山の若者が応答していた**ということです。「あなたの自殺を助けます」という誘いに「会いに行きます」と反応している。テレビでは「その日会おうとしたけれどやめて良かった」という女性も出ていました。…これは一体何なのでしょう？ 安直なことは言えませんが、私は少しだけ分かる気がするのです。

「**生きていること、命があることはただの偶然だ**。この世で苦しい目に遭って生きて行く位なら早く死んだほうが良い」という気持ちを持っている人は少なくないと思います。自分の命にリアリティーがないのです。私自身、若い時、**そんな虚しさを内に秘めて**いました。自分で死ぬ勇氣はありませんでしたけれども、早くこの世界が終ってくれた方がいいのに、と思っていました。

私は、自分自身の命の価値というものを、**イエス様と出会って初めて知りました**。神様がその命そのものである**イエス様**を、この私という、結局は自分のことしか考えられない罪人のために 十字架で身代わりにするほどに、**この私の命を重んじて下さっているのだ！**と分りました。ある時、聖霊が示して下さったとしか言いようがありません。

「**何ともったいないことを神様はなされたのだろう！**」と思いました。すると 直後に、**感謝**が溢れ、涙が出ました。私は宙ぶらりんで生きているのではないのだ、**このお方の命の中に私の命はあるのだ！**と、深く、確かな喜びに包まれました。

命は、神様から離れては命でなくなってしまうのではないのでしょうか？ けれども、**イエス様の命は、神様の命**です。このマリアとエリザベトの出会いではありませんけれども、**主の御声が響く時、**

私たちの命が喜び踊る、そのように応答する命です。私たちは、聖霊によってその命を与えられ、そしてバプテスマによって、その命に確かに与えることが出来るのです。その命を伝えることを教会は託されています。

[結] マリアと共に神様を讃えよう

あの受胎告知の時、御使いはマリアにこういいました。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」(1:30)。これはいい言葉ですね。

クリスマス——私たち一人ひとりにも神様は同じように声をかけて下さっているに違いありません。「マリア」の部分、自分の名前にしてみてください。

「〇〇よ、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」。「あなたは神から恵みをいただいた」。そうです、あなたは神様の恵みそのものである主イエス・キリストを頂いているのです。ですからマリアと共に神様を讃えたいと思います。

「この主のはしためにも目を留めてくださいました」。「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから」と。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、ありがとうございます。「あなたは恵みをいただいた」。そうです、十字架で私たちへの愛を貫き、お甦りになって永遠の命の約束を確かにされた主イエス・キリストを、私たちは頂いております。どんなに感謝しても感謝しきれません。私たちの地上の命の日々は、ただあなただけがご存知です。どうか、ただあなたを讃美しつつ、聖霊によって強められて、おのおのの課題に生きる者として下さい。主の御名によってお祈り致します。アーメン。